

幼児教育とは、
子どもたちの開かれた感覚に
ほんものの“素晴らしさ”を
伝えること——。



<http://www.Lieberrystyle.com>

「子どもってなんて繊細なんだろう」と初めて実感したのが、小学六年生の頃。学校帰りに母に用事があり、園舎にいた女の子に「園長先生いる?」と何気なく尋ねたら、その女の子の瞳がみるみる内に真っ赤になったんです。多分僕のぶっさらぼうな言い方に驚いたのでしょうが、僕にとっても驚きで、自分が子どもの心の繊細さを認識できずにいたことや、人にはそういう時期があり、それが成長とともに発達していくことに初めて気づき、興味を持つようになったんです。

僕の家は元々お寺だったんですが、母がどうしても幼稚園をやりたいと言い、父を説得して幼稚園を始めました。ですから僕は幼児教育家であると同時に、臨済宗妙心寺派の住職でもあるんです。そんな僕が大学を出て、園に就職して一年目頃。当時、母は鼓笛隊を習わせたりというような幼稚園教育の在り方に疑問を持っていて、そんな時、ドイツのシュタイナー教育に出会った。そして「この教育は未来の教育だ!」と感銘を受け、僕に学んで来いと。最初は半信半疑だったのが、実際、ドイツの子ども達を目の

前にして母の言うことが納得できました。日本の子ども達と比べて意志力、集中力がまったく違うんです。遊びへの没頭度や、新たな遊びを見出す力、何より、個としての力が際だっていて、同時に優しさや心の深さのようなものもある。幼児期の教育でこんなに違ってくるのだと本当に衝撃を受けました。

1989年から91年までの二年間ドイツ、ヴィッテンシュタイナー幼稚園教員養成所で学びました。そして試行錯誤をしながら、今までの園の教育形態を少しずつ変革していったのです。例えば、今、園では絵本ではなくグリム童話の語り聞かせをしています。それはメルヘンやファンタジーという創造の力を養いながら、言葉やその奥にある倫理観を獲得していけるようにとの考えです。幼児期にうまく内側と外側の世界とを往来できるようにしておけば、それが心の在り処として育まれていきます。まず楽しく、わくわくする中で、自らの行動を選び取っていくこと。それは身体性も同様で、楽しみながら自然に能力を身につけることが大切です。園ではいわゆる知的教育

は行っていません。その代わり歌と踊りのリズム遊技や、音楽に合わせて行うリトミック(※1)などでリズム感や集中と拡散の動きなどを学びます。徹底して子供のための保育です。子供が自分で楽しみ、選び、自分を守るすべを習得すること。親や先生はそれらを教えてくれる良き模倣の対象であればいいのだと思います。

僕は幼児教育とは、まだ感覚も意識も眠っている状態の子ども達に、本物と偽物を見分ける感覚を与え、開いていくことだと思っています。本物を与えることで本物を知る人間になるんです。「七歳までは夢の中」という言葉がありますが、外界に対して感覚を開こうとしていくその時期をどう過ごしたかが、その後の人生にどんな影響を及ぼすか。僕は今の日本で子ども達が日々何らかの犠牲になっていることに耐えられない。その状況を変える為だったら何でもする覚悟です。新しい幼稚園にもその想いが沢山つまっています。子ども達の未来について皆で真剣に考えていきませんか?◎

(取材・文 / 古田菜穂子)